

矢作古川分派施設工事での 広報活動の取り組みと課題

加藤 裕二

豊橋河川事務所 工務課 (〒441-8149 豊橋市中野町字平西1-6)

矢作古川分派施設工事での広報活動を取り上げ、一年目職員の見線で広報活動のあり方（目的・手法・内容等）について、検討、考察したものである。採用1年目職員、新規採用予定者など将来の担い手確保や一般の方にもわかりやすい広報をするための課題整理と今後の改善点について提案する。

キーワード：河川事業、広報活動、担い手確保、OJT

1. はじめに

矢作川流域は、地形特性や流域開発に起因して洪水被害が頻発しており、平成12年の東海豪雨や平成20年8月豪雨では支川である矢作古川流域に過大な分派が発生し甚大な被害をもたらした。そのため、平成21年度策定の矢作川水系河川整備計画において、適切な分量に設定され、矢作古川分派施設工事を平成25年度に着工し、平成27年度完成に向けて実施してきた。

合わせて県や市により、床上浸水対策特別緊急事業が実施されていると共に進捗状況について地域の関心が高いことから、地域住民や地権者に対し、河川行政及び河川工事に対する理解や円滑な施工のための工事内容、進捗の情報発信が必要であると考えて広報活動が実施されてきた。

その中でも矢作古川分派施設工事については、工事期間を経て完成間近であり、また施設の形が目に見えてわかるようになってきたことから、情報の受取手も土木技術者への関心や将来の担い手確保のため、土木技術者に対する技術的な視察依頼があった。

平成27年度に入省し、一般の方により近い立場で採用1年目職員や新規採用予定者及び今後土木へ携わるであろう学生への事業説明をする機会を得たことから、広報活動について検討、考察を行った事例を紹介する。



図-1

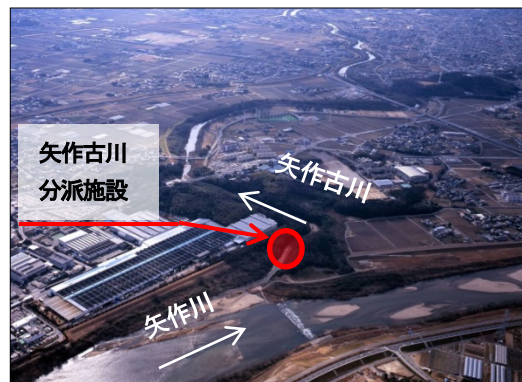


写真-1

2. 矢作古川分派施設の広報活動について

矢作古川流域では、平成20年8月豪雨により多大な被害を受けていた地域であり、国、県、市が実施する事業に対する地域住民の関心も高い地域であった。

豊橋河川事務所では、平成25年度工事発注後より中部地方整備局の旬な現場に登録して現場見学会を実施することにより、事業の進捗や事業内容を理解いただくことに気を配ってきた。

(1) 見学会の流れ

豊橋河川事務所では、総務課において見学会窓口を設置し、見学会窓口と現地案内とを分担することにより、負担が集中しないように考慮していた。具体的には、見学希望者の日程や時間、人数の割り振りなどを総務課で行い、当日は出張所職員、場合によっては工務課が対応した。

また、対象とする見学者によってパンフレットを変更し、現場状況に合わせて現場案内の場所も変えていった。

(2) 広報用パンフレット

見学会用の説明資料については、一般者向け、土木技術者向けの2パターンパンフレットを用意して説明することとしていた。各パンフレットの内容を以下に示す。

① 一般者向けパンフレット

- ・ 矢作古川分派施設の概要、過去の被災実績等
- ・ 矢作古川分派施設着手に至るまでの、矢作川本川の河川整備

② 土木技術者向けパンフレット

- ・ 事業の背景、治水の歴史、近年の浸水被害等
- ・ 計画・設計、分派施設設計上の要件、設計のポイント
- ・ 自然環境へ配慮して、環境調査や重要種の保全について
- ・ 土木技術の粋、基本構造、仮設工、基礎工事について



図-2 一般向けパンフレット

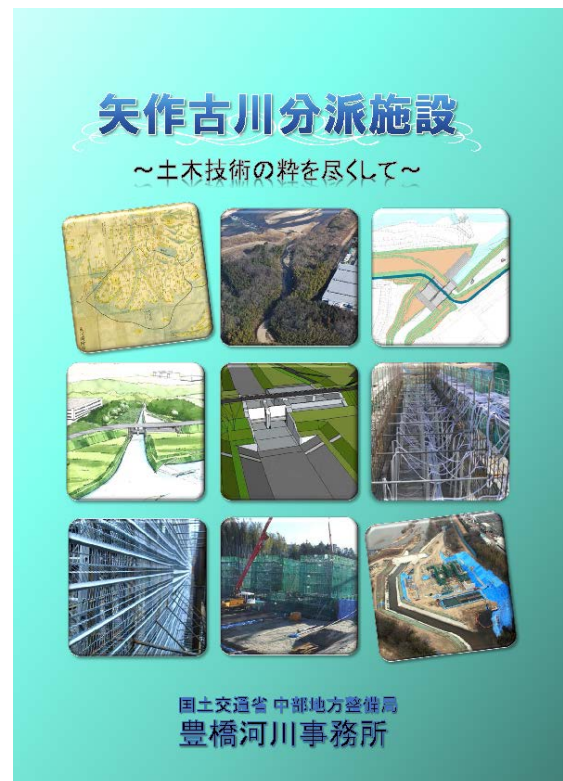


図-3 土木技術者向けパンフレット

(3) 矢作古川分派施設見学者と現場従事者の声

現場見学者数を見ていくと、時期は平成27年の7、8、9月が多く、延べ319人が見学に来た。また、職種別に見てみると学生が4割、土木系が2割を占めており、その他が4割を占めていることから、一般の方にも広く興味を持っていただけた現場であるとともに、土木の知識がない方へのわかりやすい説明が求められていた。

また、現場従事者の内70人を対象にしたアンケート調査の結果、見学会の開催時期は「いつでも良い」が半数を占めていたが、回数については、「半年に一回」が6割を占めていた。中には「見学会をこまめに行うことで安全管理に時間を割き、日々の作業に支障が出かねない」との声も少なからず寄せられ、行政の一方的な意見での見学会ではなく、現場従事者の声を反映させた見学会にしなければいけないとわかった。

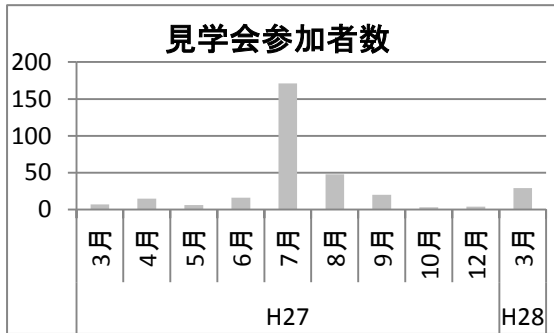


図-4 見学者数推移

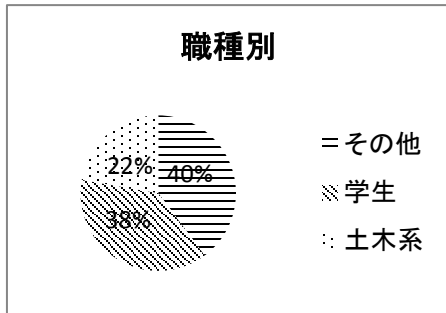


図-5 見学者職種

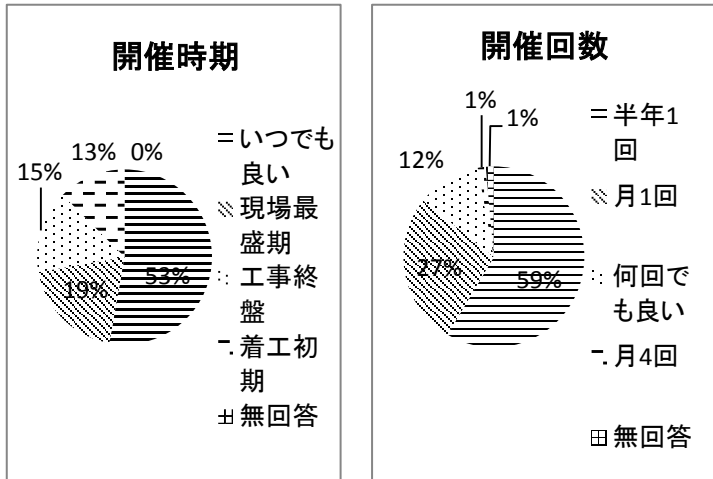


図-6 現場従事者の開催希望時期と回数

3. 広報の目的、手法、内容について

入省して1年目職員として、広報活動に参加することとなったため、過去の中部地方整備局等の広報活動内容について調べ、整理することとした。

その結果、広報の目的、手法、内容については多岐にわたることがわかり、受け手のニーズに合わせた説明をしないと「伝えたいことが伝わらない」や「知りたいことがわからない」ということが起こりうることを把握できた。

(1) 広報の目的

- ①事業内容、進捗を地域住民に理解いただく
- ②工事等による地域への協力を求めるための周知
例. 交通規制など
- ③報道対応
例. 災害など
- ④学生などの次世代の担い手確保
- ⑤土木技術や治水整備に関する技術者等の関心
例. 粘り強い海岸堤防など
- ⑥観光資源としての土木施設
例. 小里川ダム施設見学

(2) 広報の手法

- ①広報誌の作成、配布
- ②現場見学会の開催
- ③地元説明会の開催
- ④記者会見、投げ込み
- ⑤SNSを利用した情報発信
- ⑥総合学習や課外授業の活用
- ⑦勉強会、シンポジウム
- ⑧観光会社との提携など

(3) 広報の内容について

- ①事業費
- ②事業期間
- ③整備効果
- ④過去の災害や地域特性
- ⑤新技術、新工法
- ⑥被災、被害状況や社会的に関心がある事項（報道関係）
- ⑦インターンシップに関する事項（仕事に関すること）
- ⑧管理施設のPRと利活用

4. 実際に現場見学会を実施してわかったこと

(1) 現場見学会の実施内容

配布予定のパンフレットの中身から見学者に合わせて話す内容を考え、当日は一時間早く現場に行き、案内ルートの確認と安全確認を行った。

一般の方や採用一年目職員や新規採用予定職員、インターンシップ生、その他大学生を対象にしたものでは、一般者向けのパンフレットを使用し、土木関係者には土木技術者向けパンフレットで説明にあたった。

(2) 広報活動で困ったこと（失敗したこと）

① 説明時間とネタ

初回の学生を対象にした現場説明会では、現場内を移動していき、パンフレットどおり説明を行っていた。しかし、受手の顔を見るとつまらなさそうにしている方がちらほら見受けられた。また、見学者を現場内で移動させていき、一時間話続けることは知識のあまりない一年目職員としては非常に難しく、前もってきちんと準備しておく必要性を改めて感じた。また、見学者が来る時々によって現場は日々刻々と変化しており、毎回説明内容を変えていかなければいけないこともとても大変だった。

② パンフレットだけでは説明できなかったもの

私たち河川行政に携わる人は、何に基づいて河川整備を進めているのかや、河川整備計画とは何か、お金はどのようにして確保しているのか、なぜ平成12年の豪雨で甚大な被害が出ているのに、対策を取らず、平成20年の豪雨で再度被害をうけてしまったのかなど、説明しきれない部分も多々あった。

(3) 1度目の経験をして改善したところ

初回での失敗を活かし、次からは学生が興味を持ちそうなネタを話す内容に入れたり、古地図を用いてパンフレットに載っていない話をしたりして、飽きさせないようにした。具体的には、誰もが知っている歴史上の人物の名前を出したり、流量はイメージが湧くようにプール何杯分にしたりした。

5. まとめ ～今後の課題と改善点～

広報活動の現場見学会では、伝えたい内容を絞って限られた時間で説明することが必要であり、天候や現場の進捗などの状況にあったネタを事前に準備することが重要であった。

また、一般の方向けのわかりやすいパンフレットの作成も課題となっており、土木技術者だけで作成するの

はなく、土木に携わったことのない一般の方や採用間もない職員を巻き込んで作成すべきである。私自身は現場見学会を通して、時代の流れに合わせて現場でスマートフォンを用いてパンフレットや現場情報をダウンロードしてもらえばもっと若者に興味を持ってもらえるのではないかと思った。

広報活動には行政の考えの他に採用間もない職員のまっさらな目や一般の方、現場従事者など多方面からの意見も反映しなければならず、またSNSやスマートフォンなど、時代の流れに合わせて常に発信方法も変化させていかなければいけないことが今後の課題である。このような機会をOJTの一環として一年目職員全員に与えていただければ、若手のモチベーション向上や知識の向上の一助となり、多角的な視野を養う良い機会になると考える。



写真-2 現場見学会



写真-3 完成式典